2019/9/22　中野教会　「聖書の学び」

　　　　　　　　　　　　**「『天使』の発生と拡大」**

　中間期に関する学びで今日は「天使」について学びたい、と思います。ルカ福音書1:26のマリアの懐妊のところにガブリエルがでてきます。またユダの手紙1:9に御使いの頭ミカエルが出てきます。黙示録12:7にもミカエルが出てきます。また、16:1に「七人の御使い」という表現もでてきます。また、カソリックで聖書に準ずる文書として扱われている旧約外典のトビト書にはラファエルがでてきます。この三人の天使が三大天使といわれるものです。この「御使い」という言葉は、ヘブル語では「mal-a:k」と言い、ギリシャ語では「angerlos」です。このギリシャ語が英語では「angel：enjel」となります。意味は両方とも「伝令、メッセンジャー」の意味のことばです。この神のメッセンジャーに名前が付けられ「天使」と呼ばれるようになったのです。旧約聖書の初めの方の文書には「神のメッセンジャー」の意味でこの「mal-a:k」がよく使われています。新改訳聖書では「御使い」と訳されています。特に名前はありません。それが、BC2c半ばに全体編集がされたと見られるダニエル書においてミカエルとガブリエルという2人の神の使者が登場します。この名前のついた御使いを通常、天使と言います。それが中間期の黙示文書のなかで大きく展開され、多くの天使が生まれる結果となった、と言えそうです。多くの天使は黙示文書の中で培われ、ユダヤ教神秘主義のなかで育っていったと考えられます。新約聖書には天使の伝統は一部受け継がれていますが、それは終末思想の関連で語られる者に限定されています。しかし、「人の子」の観念が漸次、天的存在者になって行くに従い、この天使の観念に近くなっていったようです。特に、「終末的福音に関する人の子」は神の御使い＝天使のイメージと重なって行ったようです。ユダヤ教神秘主義における「天使」のイメージもキリスト教に受け継がれ西方教会、東方教会ともども「天使」の観念を自らの宗教教理に取り込んでいくようになります。日本のキリスト教の中心は西方教会の流れにありますが、カソリック教会は「天使」に対する信仰を大切にしています。プロテスタント教会は、天使思想に警戒的態度を一貫してとり続けています。聖書に明記されたミカエルとガブリエルについてはこの神の使者としての役割を認めるけれども今現在も天使が特別の役割を担っている、という考えはしておりません。

　では最初に中間期の「天使」に関し書かれている文書をみることから始めます。まず、第一エノク書です。これは偽書の一つで、天使が登場するのは1-36章の「寝ずの番人の書」と、37-71章の「たとえの書」です。「寝ずの番人の書」の成立年代はBC3cとされています。「たとえの書」の成立はAD270頃と推測されていますが、この文書の元となった「巨人の書」はBC2c末に成立していた、と言われています。従って、第一エノク書の「天使」「み使い」に関する部分はBC3-2世紀にかけてのもの、ということができます。この時代はプトレマイオス朝エジプトの支配からセレウコス朝シリヤの支配に移り、更にハスモン朝の発生・成立して行く時代です。文化的には、ユダヤは漸次、ヘレニズムの影響を受けていく時期です。それに対抗し、パリサイ派、エッセネ派が生まれていく時期でもあります。

まず、6章で、天のみ使いたちが見目麗しい美人の娘を妻とし子をもうける、という話がでてきます。天的存在が地上に降りてきたものとして「み使い」が語られます。そして、そのみ使いとしてシュミハゼ等20人の名があげられています。まだミカエルとかガブリエルの名はありません。9章に入ると、地上での争いを見ている天上の存在として、9:1「そのとき、ミカエル、ガブリエル、ウリエル、ラファエルが空から見下ろすと、おびただしい血が地上に流され、ありとあらゆる暴虐が地上に行われているのが見えた。」と言われています。のちに４大天使とされる「ミカエル、ガブリエル、ウリエル、ラファエル」が登場します。そして20章では「寝ずの番をするみ使いたちの名」があげられています。20:2-7で「ウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界とタルタロスを見守る。/ラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の霊魂を見守る。/ラグエル、み使いの一人、世界と光に復讐する。/ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類の中でも最優秀な部分、（すなわち神の選）民をゆだねられている。/サラカエル、聖なるみ使いのひとり、霊魂を罪にいざなう人の子らの霊魂を見守る。/ガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇と（エデンの）園とケルビムを見守る。」とあり、ここに出てきた天使にレミエルを加えて七大天使といわれるようになります。

　これがのちの文書「たとえの書」では四大天使についてのみ語られます。40:9-10では「彼（平和の御使い）は私に言った。「最初の者はあわれみ深く、めったに怒らない聖ミカエル、第二は人の子らのいっさいの病と傷をつかさどるラファエル、第三はすべての力をつかさどる聖ガブリエル、第四は永遠の生命を嗣ぐ者たちの悔改めと望みをつかさどる、ぺヌエルである。/以上はいと高き神の四天使であり、そのときわたしは四つの声を聞いた。」と記されています。先ほどの四大天使との比較では「ウリエル」が「ぺヌエル」に置き換わっています。そして注意すべきは51:2-4です。「彼（メシア）はそのなかから義人たち、聖人たちを選び出す。彼らが救われる日が近づいたゆえ。/そのとき、山々は雄羊のように躍り、丘は乳をたらふく飲んだ小羊のようにはねまわる。そして、みな天使になる。」とされています。終末の日に、メシアが義人たち、聖人たちを救い出し、彼らはみな天使になる」といわれているのです。地上の人間のうち、義人・聖人は救いの日に天使に変えられる、という預言です。これは新約における、主イエスの姿変わりを類推してしまいます。

　次に天使が登場する文書としては、外典の「トビト書」があります。この文書はトビト家の息子トビアとラグエル家の娘サラが天使ラファエルの導きにより結婚する、という話です。ユダヤ教の信仰に忠実な両家は祝福を受ける、という教訓物語ですが、ラファエルという天使が大活躍する点が注目に値します。この物語によってラファエルは三大天使の一角を占める存在となります。二大天使はミカエルとガブリエルですが、このラファエルを加えると三大天使になります。ラファエルは神の祝福を齎す天使として人々の愛着を得る天使になって行きます。相談相手としての天使ラファエルが示されている5:4-6をお読みします。「メディアまでの道に詳しく、一緒に行ってくれる人を探しに、トビアは外に出た。出てみると、天使ラファエルが目の前に立っていた。しかしトビアには、神の使いであることが分からなかった。 /そこでトビアは尋ねた。「若者よ、あなたはどちらの方ですか。」ラファエルは答えた。「わたしはイスラエル人で、あなたの同族の者です。仕事を見つけにここに来ました。」トビアは更に尋ねた。「メディアに行く道をご存じですか。」

ラファエルは答えた。「はい、わたしは度々メディアに行っており、どの街道もよく知っています。メディアに行ったときに、その地方のラゲスに住むわたしたちの同族のガバエルの家に何度か泊まったこともあります。エクバタナからラゲスまでは 二日の道のりです。ラゲスは山岳地帯にあり、エクバタナは平野の真ん中にあるからです。」 とあります。トビト書はBC200-170の頃の著作と推測されています。エジプト支配からシリア支配に変った頃です。この頃のシリヤ支配はまだユダヤの自主性を尊重したもので、まだ自由な雰囲気が残っていた、と思われます。

　それから、シリヤの圧政が始まり、マッタティアの反乱が始まりますが、その頃の著作と推測されるヨベル書という文書があります。これは49年毎に訪れるヨベルの年の律法を守るよう勧める文書です。これは7年周期の七回目で50年目に①畑を休ませる、②売却された土地を売主に戻す、③奴隷等すべての人民を解放する、を柱とする解放の年とすることを意味しています。しかし、聖書や外典・偽書を見る限り本当に実行された様子はありません。このヨベル書は小創世記とも言われ、創世記の物語を別の言い方で繰り返しつつ、解放の年としてのヨベルの年の意義を述べている文書です。ここに、天使が登場します。1:25に主がモーセに告げた言葉があります。「彼らはみないける神の子と名付けられ、すべての霊、すべての天使は知るであろう。彼らが私の子であり、わたしが誠実と義にもとづく彼らの父であり、彼らを愛していることを知るであろう。」とあり、イスラエルの民について「いける神の子」と名付け、天使を通して主が愛を示すことが言われています。天使は神の使者の役割を果たしています。2:2には「彼（み前の天使）は最初の日に上なる天、地、水、彼に仕えるすべての霊、み前の天使、きよめの天使、火の霊の天使、風の霊の天使、暗闇と雪と雹と霜と雲の霊の天使、音と雷鳴と稲妻の天使、寒さと暑さと冬と春と秋と夏の霊の天使、天と地と深淵にある彼の作品のすべての霊の（天使）、暗闇、光、暁および夕（の霊の天使）を理性でわきまえ、準備して創造されたのである。」とあり、御前の天使、即ち主なる神に直接まみえる天使が大自然の至る所に居る霊の天使を創造された、と記しています。天使がすべてのものに霊として宿る、という考えが述べられており、汎神論、自然神的傾向を示しています。この考え方はあきらかに伝統的なイスラエル信仰に反するものです。天使をあまりに拡大していくと、唯一の主なる神への信仰から踏み外す危険もあります。5:1には「 人類が地の表に増え始め、彼らに娘が生まれた時、主の御使いたちは、このヨベルのある年に、彼女らが見た目に美しいことに気づき、自分で相手を選んで結婚した。」とあり、先程のエノク書に記されている表現と類似のことが書かれています。このような天使はギリシャ神話における神々の話を思い起こさせる表現で、多神教的文化の影響が多分に見られる、と言ってよさそうです。

　その他、中間期の種々の文書が天使のことに触れていますが、何種類かの天使が登場するのは外典のエズラ記（ラテン語）と呼ばれている文書で、その3-14章が第四エズラ記と称しユダヤ教の黙示録です。ここに天使が何度かでてきます。この文書はAD1cのユダヤ教文書と考えられていますが、ここに示された考えは中間期末期に醸成されていたものと考えられます。まず、エノク書に出ていたウリエルです。4:1-3で「すると、わたしのもとに遣わされたウリエルという天使が答えた。 /「あなたの心は、この世のことに、すっかりうろたえている。それでもあなたは、いと高き方の道を理解したいと思っているのか。」 /わたしは、「はい、わが主よ」と答えた。すると天使はわたしに言った。「あなたに三つの道を示し、三つのたとえを提示するためにわたしは遣わされた。 」と言われています。ウリエルは「神のみまえに立つ四人の天使」の一人に数えられており、ハイ・レベルの天使の役割が与えられています。ウリエルは神の言葉を預かり、信仰者に取り次ぐ役割です。いわば預言者が天上の存在となったようなものです。イスラエルの伝統的神学は所謂仲保者を認めません。預言者はあくまでも地上の人間であり、天上の存在ではありません。これが、イスラエルの苦難の歴史のなかで、漸次神格化され天上の存在にされていったといえます。その典型がモーセ、エリヤです。これが新約聖書に一部受け継がれています。主イエスが姿変わりをした時、天上でモーセ、エリヤと話をしていることが描写されています。このことは当時、民衆の間に広がっていた、モーセ、エリヤに対する崇敬を前提に起きた幻と考えられます。ユダヤ教における黙示録は数世紀後のユダヤ教神秘主義の思想的基盤となって行きます。

　中間期における天使に関する文書の主なものをみてきました。それでは旧約聖書の中で天使はどのように扱われているのでしょうか。最初に申し上げた通り、天使に対応するヘブル語は「mal-a:k」です。これは旧約聖書のほとんどの場合「み使い」と訳されています。聖書の中で中間期文書であるダニエル書7章以下において初めて、ガブリエル、ミカエルの名が登場します。エノク書で名があげられている二人の天使です。新改訳聖書は旧新ともすべて「み使い」と訳しており「天使」とは訳していません。唯一「天使」という言葉が出てくる詩篇138:1で「天使」と訳されている元の言葉は「elohi:m」であり、「神々」という言葉です。神の使者「mal-a:k」ではありません。口語訳聖書では旧約聖書の「mal-a:k」のうち詩篇、ヨブ記で一部「天使」と訳されている部分もありますが大部分は「み使」と訳されています。しかし、新約聖書になると「天使」という訳がでてきます。

旧約聖書で「み使い」が出てくるところを若干示します。創世記ではまず19:1「そのふたりの御使いは夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところにすわっていた。ロトは彼らを見るなり、立ち上がって彼らを迎え、顔を地につけて伏し拝んだ。」とあります。アブラハムの甥ロトのところに神の使者2名が現れる場面です。22:12「御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」とあります。これはイサク奉献のところでみ使いがイサクを殺すのを止める場面です。この神の声を伝える御使いはのちにザドキエルという名の天使だ、ということになっていきます。み使いが神の言葉を告げます。民数記20:16「そこで、私たちが主に叫ぶと、主は私たちの声を聞いて、ひとりの御使いを遣わし、私たちをエジプトから連れ出されました。今、私たちはあなたの領土の境にある町、カデシュにおります。」とあります。ここで主なる神はみ使いを遣わし、出エジプトを成功させた、と言われています。み使いはモーセを導きました。士師記6:13「ギデオンはその御使いに言った。「ああ、主よ。もし主が私たちといっしょにおられるなら、なぜこれらのことがみな、私たちに起こったのでしょうか。私たちの先祖たちが、『主は私たちをエジプトから上らせたではないか』と言って」とあります。本質的には主なる神の導きではありますが、主なる神を直接名指しせず、その使者の導き、という形での表現をしている、と解釈できます。その他多数ありますが、黙示文書とも言えるゼカリア書からあげてみます。1:9「私が、「主よ。これらは何ですか」と尋ねると、私と話していた御使いが、「これらが何か、あなたに示そう」と私に言った。」とあります。2:3「私と話していた御使いが出て行くと、すぐ、もうひとりの御使いが、彼に会うために出て行った。」と言われています。6:5「御使いは答えて言った。「これらは、全地の主の前に立って後、天の四方に出て行くものだ。」とあります。主なる神を人間が直接対話の相手方にする訳に行かないので、間に「み使い」が入っている、と言えなくもありません。ゼカリヤ書に見られるように旧約の時代があとになるとこのみ使いは天上の存在に近づいていきます。み使いは、天使に近づいていっているのです。

このきわめつけがダニエル書です。ガブリエル、ミカエルが天使の名で登場しますが、これ以外にも天使に類似の描写が多数現れます。「み使い」との表現とは別に、7:13「私がまた、夜の幻を見ていると、 見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、 年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。」という表現がでてきます。ここでの「人の子のような方」とは主イエスの予型であるというのが伝統的なキリスト教の教理です。7:16にはダニエルの「かたわらに立つ者」という神の使者のような存在がでてきます。7:18では神の国を受け継ぐ者として「いと高き方の聖徒」という表現もでてきます。「いと高き方」とは神様のことですから「神の聖徒」となります。これは天使のような存在です。7:25では「いと高き方の聖徒である民」が御国を継ぐと言っています。これはイスラエルの民が聖なる者とされる、ということを意味しています。御国においてはイスラエルの民が天使のような存在とされるのです。8:13では一人の聖なる者がもう一人の聖なる者と語る場面が描写されています。ダニエルがこの幻の意味を知ろうとしたところ「人間のように見える者」が説明してくれた、と言われています。また10:5では「亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めた」者が登場します。これも天使のような存在です。そして、「思慮深い人」というダニエル書にだけ出てくる存在がありますが12:3で「思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」というわれ、この「思慮深い人」も天使に似た存在とされています。このように、ダニエル書には天使類似の存在が多数でてきます。これらの諸々の存在が終わりの日にすべて天的存在とされ、御国の主人公になって行くわけです。

ダニエル書7:13の「人の子のような方」も天使のような存在で語られています。この「人の子」という表現はエノク書において多用され、天使のような扱いで「人の子」という言葉が使われています。ダニエル書ではみ使い＝天使を多様な表現で言い表していますが、中間期に「人の子」と「み使い」即ち天使とが終末論的世界の下で同一視されていくのです。「人の子」は実に多様な意味を含んでいくことになりますが、天使と同一化される側面において終末論的「人の子」になって行きます。天使のイメージが付着してくるのです。旧約聖書において「み使い」とされている言葉の意味内容の変化、そしてそのみ使いが中間期の文書の中で漸次、天的存在となっていき、「人の子」の観念と結びつき、新約における「人の子」の一面を形成するに至っている、とみることができます。これらの流れは黙示文書の中で培われたものです。

新約聖書の最後の文書「黙示録」には「御使い」という表現が多数出てきます。75節に登場します。1:1から出てきます。「イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。」とあります。黙示録は終わりの日に起きることを述べた文書ですが、その言葉の使用は大変旧約的です。

ここの「御使い」という言葉はギリシャ語で「angelos」、ヘブル語訳「mal-a:k」であり、「天使」と同じ言葉です。新共同訳では「天使」、カソリックのフランシスコ会訳は「み使い」、バルバロ訳は「天使」です。英語ではいろいろに訳されていますが、大部分は「angel」です。日本語訳では「御使い」と「天使」の2種類になっています。黙示録は「七」というKeyNumberに基づく叙述が多くを占めますが、七つの教会の代表する者、もしかしたら守護霊をさして「教会の御使い」と言っています。また、七人の御使いのそれぞれにラッパが与えられ、御使いがラッパを吹き、災厄が広がる、という話もあります。大淫婦、大バビロンの滅亡を告げる御使いや、七つの鉢をぶちまける御使いも出てきます。地球最後の大災厄です。最後は神の国の完全到来を告げる御使いです。また「四人の御使い」という表現や「七人の御使い」という表現もあり、のちの四大天使、七大天使の源流になっています。天使の固有名詞は全くでてきませんが、背後にはエノク書などの黙示文書の伝統があることは当然です。エゼキエル書、ダニエル書、黙示録が聖典聖書の三大黙示文書です。黙示録は「新約のダニエル書」ともいわれ、表現の仕方がダニエル書7-8章に大変似ています。ダニエル書の時代にイスラエルの信仰者はセレウコス朝シリアによる大迫害を経験しますが、黙示録はローマ帝政による来るべき大迫害時代を予感しながら叙述された文書です。天使・御使いは両文書において決定的役割を果たしています。

　ローマ帝政がキリスト教を国教化したのち、キリスト教のなかで天使論がもてはやされました。7cのグレゴリオ1世は七大天使を決定しました。四大天使はユダヤ教と共通していますが残りの三つは異なります。そしてローマ・カソリックは天使の階級とか「---の天使」というようなことも定め、一大天使世界を作り上げました。またサタンを頂点とする堕落した天使、堕天使の世界をも作り上げました。更に、キリスト者を守ってくれる守護天使を定めたりもしました。今も、三大天使、ミカエル、ガブリエル、ラファエルを祝う9月29日、守護天使を記念する10月2日が祝祭日とされています。守護天使は日本での守護霊みたいなもので、オカルト的雰囲気が漂います。お遊び程度のことであれば、と訳言うこともないと思いますが、神学のなかにちゃんと位置付けられた話ですので、「どうでもよい」という訳にはいかないと思います。さらに問題なのは「聖人」「聖者」です。「福者」の方は、神的傾斜はありませんが「聖人」「聖者」となると、単に偉大な人物というにとどまってはいません。礼拝と崇敬の境界線は明確とはいいがたいのですが、日本人の場合は天皇崇拝との関係でこれを問題とせざるを得ません。イスラエル信仰においては、そもそも偶像崇拝はなぜあれほど厳しく禁じられるのか、ということもちゃんと考え理解しておく必要があります。カソリック教会が日本の天皇崇拝やドイツの「ハイル・ヒットラー」への抵抗勢力足りえなかったのにはこの「聖人」「聖者」を天的存在に近いものとしていることが影響していなかった、と断定できるでしょうか。プロテスタントもこの問題鵜について言えばカソリックよりましだったとも言い難いのではありますが。

天的存在として我々を導いてくれる天使の存在を承認するにしても、天使の観念が自己膨張して多神教的汎神論に陥る危険を、はっきりと認識しておく必要があります。天使は私たちに神の祝福をもたらしてくれる存在である、ということは中間期の天使に関する表現にでてきますが、「守護天使」という存在は明示された箇所はありません。プロテスタントでは聖霊の働きのひとつ、ということになるでしょう。逆に、このような天使を求めるのが人間の本性であり、神様が創造されたものである、と理解するのであれば、天使としてはミカエル、ガブリエルしか認めず、あとは「聖霊、悪霊」の働きということで呪術的な世界が横行するのを放置しているプロテスタントの態度も問題性を感じます。新、旧約聖書にあれだけ「御使い」が登場するのに、無視しているような態度です。名前をもった天使と言うことは、霊に人格を認めることを意味していますから注意を要することは事実ですが、権能を明確にし、呪術的な傾向を排除し、悪魔的力が背後で働く余地を封じる、という戦いも重要なように思います。祈ります。